

て、あまたの名作を生むことの出来たのも佐伯である。あつと味の悪い憶い出を幾分残したかも知れないが、独歩と佐伯とは、断つことの出来なない深いえにしがあつたのである。
(おわり)

研究

大賀宗九

— 博多 幻住庵を訪ねて —

在福岡市

会員 佐 脇 貫 一

さる九月五日、私は福岡市博多区御供所所の聖福寺を訪れた。それは聖福寺山内の幻住庵に、大賀宗九・宗伯(また佐宗伯)父子の墓があるからであつた。

安国山聖福寺は、わが国禪宗(臨済宗)の始祖栄西禪師が宋から帰朝した後、建久六年(一一九五)六月、鎌倉の將軍源頼朝を大檀越として建立した寺である。また幻住庵は天目山と号し、聖福寺の塔頭として、延元年間(一一三六—一一三九)に現在の東区馬込に創建され、正保三年(一六四六)聖福寺山内に移建された寺庵という。聖福寺の護聖院(湖山堂)前を塙屋に沿うて行くと塔頭の一つ西光寺があり、西門に出るが、その道の突きあたりが幻住庵である。

私はその日の午下が、静かな聖福寺の山内を歩いた。もちろん幻住庵の所在を求めてだが、聞く人もないまま、足元まかせて山内を一周し、ようやく幻住庵に行きついた。人気がない境内、大賀宗九・宗伯墓所の案内標

板が、白く秋の日に映えている。

これまで私たちが大賀宗九の名を知ってはいないが、その人物については「大分県偉人伝」所載以上のことは知らなかった。ただ郷土史家故高司正直氏(第八代佐伯所長)が、親交のあつた故大賀善之進氏(宗九の子孫)らによつて、昭和四年六月二十日、幻住庵で修された大賀宗九三百年祭に参列された後、執筆した史記「大神大学頭宗九伝」を讀んで、いさゝか宗九の生涯について知ることができた。

しかし、これはあくまで史譯であり、骨子は「大賀善之進家の伝承によるもの、史実とはいえない点が多いようである。

累田藩政下における博多商人三傑といへば、普通島井宗室、神屋宗湛、大賀宗伯の三人をおけるが、大賀氏では宗伯より宗九をおげるのが至当であろう。宗室、宗湛に位して二十余年、海外貿易によつて財をなしたの故父の宗九で、宗伯はそのあとを承けて、中大賀、下大賀といわれる博多商人格式の首位、两大賀の基礎をつくつた人物である。

(注)島井宗室 博多の人、通称は徳木次次郎、父を水部右衛門次久といひ、家は代々酒屋と土倉を営み、父祖以来対明貿易を行なつた博多の富商。茶道を通じて大関秀吉に近づき、その蒙恩がりで秀吉に一目をおかしていた。

神屋宗湛、本名は神屋善西郎と貞清といひ、博多の大貿易商神屋家に生れた。父の名は鯉葉、祖父は石見銀山を振いたといふ神屋専貞である。

さて大賀宗九は佐伯惟信の子と伝えられる。この惟信は佐伯惟治の滅亡後、榊半礼城主を継いだ佐伯三郎惟禎(佐伯氏十一代惟常の兄)の子で、祖父太郎左衛門惟信と同名である。宗九は惟信の長子で、永祿四年(一五六二)の生れ

通称を大神甚四郎、名を信好といった。父惟信のときから大友宗麟に仕え、蒲部衆に名を連ねていたが、天正十五年（一五八七）宗麟が死し、大友家の前途に望みを失った信好は諸國を流浪、そのころ豊前半國の領主となった黒田如水に知られ、如水の庇護をうけて対外貿易にあたった。甚四郎改め九郎左衛門尉信好は、黒田氏の被官として、博多の肥前平戸を根拠地に、貿易を率領した。なお信好が宗九と号したのは慶長以後で、推察してからである。

慶長五年（一六〇〇）十二月、黒田長政は筑前五十二万石の大宰として名島城（東区名島）に入ったが、翌六年から博多の西隣福所（後福岡と改む）の城に舞鶴城を築いた。かくて宗九は、如水、長政二代の公用商人として博多に居をかまえ、対外貿易に従事したが、元和七年（一六二二）家業を長子其兵衛道善（大賀善之進氏の系譜では善兵衛要員）と次子九郎左衛門信房（道句）に譲り、吉野十二才の三子惣右衛門信貞を伴って、右衛門の阿媽港に航した。宗九はもともとなく帰國して博多に住み、九郎左衛門とよに大いに貿易事業を行なったが、寛永七年（一六三〇年）五月十三日病没した。年七十才。

宗九が、大神の姓を大賀と改めたことについては、次のような話が伝えられている。慶長のころ博多に未だ明人が、明國では神の字は商運にめぐまれないといわれるから、同じ讀みの賀に改めよとすすめたので、書き改めたという。

一方、惣右衛門信貞は阿媽港にとどまり、いわゆる日僑として手広く貿易事業を営み、巨万の富をつくられたが、二十八才のとき帰着して、長崎に住んだ。ときあたかも島原の乱に際会し、藩主黒田忠之の命をうけて、金銀輜重を調達した。また正保四年（一六四七）ガレウ夕船の長崎

来航問題がおこり、幕命によって同船の焼討を評議が決定し、長崎警備の任にある黒田、鍋島の二藩が、その焼草を調達することになった。そのとき鍋島藩は手まわしよく焼草をおつめたが、黒田藩は固元からの荷送りか延引し、藩主忠之をばじめ藩当事者は、幕府の恩恵をおそれて困窮した。

長崎におつた大賀宗伯は同宗忠と協力し、長崎付近で焼草を大量に入手、藩の危急を救ったので、忠之は宗伯の功を賞し、永代五十人扶持を賜うした。

宗伯とは、晩年剃髪してからの名で、また關鴻齋西江と号したので、法名を西江宗伯ともいう。

寛文五年（一六六五）七月十七日博多で没した。年五十六才であったという。（おわり）

轟 峠 を 越 す

（埋草まで）

去る九月四日、私は青山の奥から、昔の人々の苦勞をしのびつつ、夷峠を越す山道にわけ入った。

川べりの旧道は、穂の生えた丈なすすすきが道をふさぎふみわけると難澁した。右手は谷をへだてた密林、僅かな登りの道は平坦ではあるが、藪の元気が次々に顔にへばりつく。はるか高い道路を、自動車が行き交うて立ってながら行き交うている。

トンネル下から大きなジグザグ道となり、密林をぬけて峠につづく。パツと明るくなったところ峠である。茶店の跡は大明竹が生いしげい眼の前には重畳の山々を越して、はるかに蒲上の家並が見え、そして海である。おりからちようど登りサイレンがきこえてくる。私は草むらを押してはるがて、わづらり登食をとる。サイツかれてはいるが、秋風が快適である。

下りの道は羊齒でふさがっていて、甚奇した。しかし元気に蒲江目指して歩きつつけた。（羽柴）